



HOMO FABER  
Crafting a more human future



press release

HOMO FABER 2022

Special column vol. 01

室瀬 和美 Kazumi Murose

重要無形文化財「蒔絵」保持者（人間国宝）

## 「ものづくりは、何をつくるかではなく、 どう生きるかという思いの表れ」

漆芸家の父・室瀬春二の作品づくりを初めて手伝ったのは、14歳の夏休みのこと。これがかっかけとなり、室瀬和美はその3年後の17歳で、漆の世界に進むことを心に決めた。「東京オリンピックが開催され、東海道新幹線が開通した直後の日本は高度経済成長の真っ只中。世の中が日々新しい変化に満ちていました。こうした背景のなかで、千年以上続く伝統工芸の仕事に就くのは時代遅れだと言われ、『漆なんて、もうすぐ消えてなくなるんだぞ』と高校の先生にも諭されたほどです」だが、ダメだと言われるほど、反発心も生まれる。室瀬は、「消えてしまうのなら、自分がその最後をしっかりと見届けてやる」といった気迫で周囲の反対を振り切った。

基礎的な知識と技術は父から習得しつつ、東京藝術大学に進学。そこで彼を迎え入れた漆芸の大家、松田権六（まつだごんろく）、田口善国（たぐちよしくに）が、室瀬の人生に大きな影響を与えていく。「技術にもまして、学ぶべきことは過去の歴史と文化にすべて示されている。漆芸の世界を目指すなら、まずは正倉院の宝物を見ろ」と、松田権六から指導を受けた室瀬は、大学一年から毎秋行われる正倉院展を欠かさず鑑賞。50年間通い続けたいまでも、初めて見るものや新しく学ぶことがあり、「人生最大の宿

題ですが、一番の財産になっていると思っています」と振り返る。

さらに田口善国からは、「漆作品は数百年の単位で長く持つが、いずれ自身の作品も後世の人に修復してもらうことになる。だからこそ、一つ作ったら、一つ直すくらいの感覚でいなければならない」と言われ、東京藝術大学大学院を修了後、10年のあいだ東京国立博物館で文化財の修復に携わった。「自らの手に名作をしっかりと抱えて観察できることは、かけがえない経験でした。一つひとつの技や意匠にも増して、時代ごとの文化や感性、そしてエネルギーの凄まじさが、ものを通じて伝わってくるんです」

時代を経て後世に残されるものには、確かに絶対的な技が存在する。しかし、日本の工芸は超絶技巧だけを表現すれば良いという世界ではないと室瀬は話す。「工芸の根本には、自然を尊び、その恩恵に感謝する心があります。我々漆芸家は100～200年かけて育った木を素材に使うのですから、人が自然の素材に手をかける以上、さらに長い時間の経過に耐えうるものに仕上げなければなりません」

もう一つ大切なのが、作品は最初からガラスケースに入った鑑賞物ではなく、暮らしのなかで実際に使われ、時ともに過ごしていくものであるということだ。「人々の生活のなかで毎



© MOA Museum of Art

日使うものもあれば、季節毎の行事で使うものの、一生に一度しか使わないものもあるでしょう。そして、御神宝（ごしんぼう：祭神にまつわる宝物や調度品、装束など）のように、神が使う道具も含まれます。誰かに使われる以上、単に形や意匠を操る技だけでなく、使う相手を尊重し、人の感覚や感性に響くようなものづくりを達成する思考が工芸には必要とされます。だからこそ、作り手に大切なのは、何をどうつくるかという力量ではなく、どう生きるかという思いを示す力なのではないでしょうか」

人を尊び、ものづくりに真摯に勤しむ。それこそが、工芸が先達から受け継ぎ、後世へと伝えゆくものだと室瀬和美は信じている。「目まぐるしく状況が移り変わっていった20世紀から、世の中がもう少しだけ冷静に状況を見据え、昨今では、環境保全や持続性のあるものづくりが当然のことと言われる時代になりました。仕事を始めた頃には、『もうすぐなくなるであろう、前時代的な古くさいものづくり』と言われた工芸ですが、よくよく考えてみれば、いまの時代にぴったりと合う普遍的な存在であり、最先端の感覚とも言えるのではないのでしょうか」



室瀬 和美／むろせ かずみ

1950年東京都生まれ。1976年東京藝術大学大学院美術研究科漆芸専攻修了。蒔絵を中心に作品を制作すると同時に、文化財保存修復や、国宝「梅蒔絵手箱」（三嶋大社蔵）の復元模造制作などに携わる。2008年重要無形文化財「蒔絵」保持者（人間国宝）に認定される。